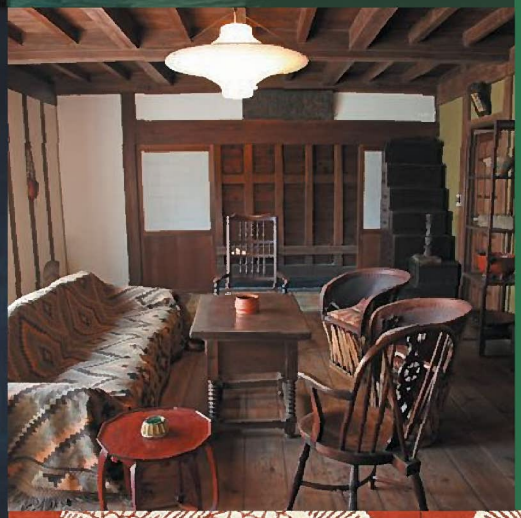
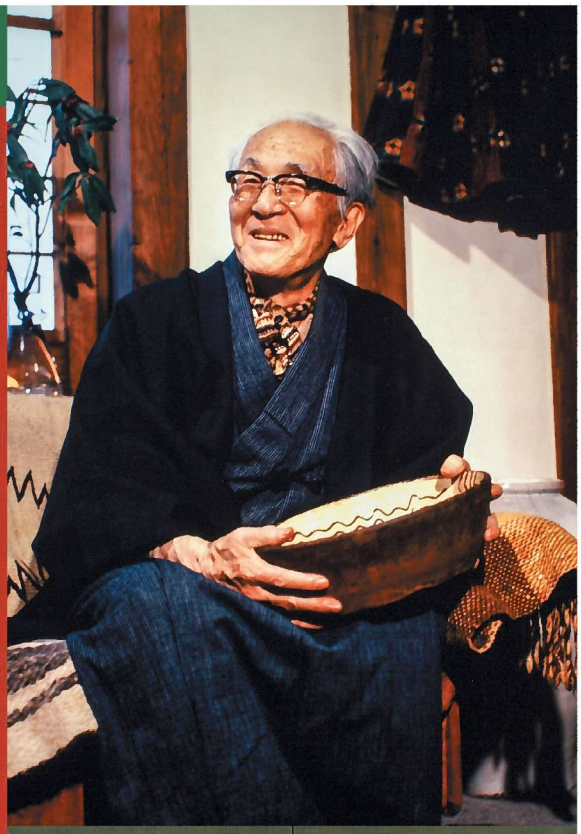
シリーズ・日本の匠と出会う旅②

型絵染 人間国宝の世界 芹沢銈介



「型絵染」で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された芹沢銈介。文字や動植物、身の回りの品々をモチーフに、着物や絵本、カレンダー、ガラス絵などさまざまな分野を手がけ、デザイン界に新風を吹き込んだ芹沢の世界をご案内します。

日本の匠と出会う旅②



人間国宝

芹沢銈介の世界

型絵染

自ら下絵を描き、型を彫って、布や紙を染める「型絵染」。
その型絵染で人間国宝となったのが芹沢銈介です。
弥生時代の登呂遺跡に溶け込むように建てられた
静岡市立芹沢銈介美術館に、その足跡を訪ねました。

写真　左：「飛の字」1961年頃 麻に型染　右上：スリップウェアを手にする芹沢銈介 1980年（撮影 望月 康）　右下：「四季曼荼羅図二曲屏風」1971年 絹に型染

転機となった2つの出会い

「型絵染」という言葉を聞いてピンとこなくても、ここに掲載した作品を見れば、どこかで見たことがあると感じる人も多いのではないでしょうか。芹沢銈介は型染を主軸に、終生にわたって独自の世界を切り拓いてきた静岡市出身の染色家です。

明治28（1895）年、静岡市の裕福な呉服太物卸商だった大石家の二男として生まれた銈介は、幼い頃から画才があり、画家になることを夢見ていました。しかし、東京の美術学校を目指していた中学生の時に、実家が隣家からの出火で全焼。その後家運が傾いたこともあり、叔父の勧めに従って東京高等工業学校（現・東京工業大学）に入学します。美術への道をあきらめきれなかった銈介は、ここで図案科を専攻しました。

卒業と同時に静岡に戻った銈介は、裕福な商家の娘、芹沢たよと結婚し、芹沢姓となります。その後、静岡県工業試験場や、大阪府立商品陳列所に勤務して図案を指導しましたが、「具体的な『物』に自分を見出したい」と退職。ろうけつ染めを手がけるようになります。ところが大正13年に、保証人になっていた親戚の病院が倒産し、莫大な借金を背負わされて借家暮らしを余儀なくされるなど、またもや大きな災難にみまわれます。

大きな転機が訪れたのは、昭和２（1927）年。芹沢が32歳のときです。民藝運動を起こし、“用の美”を見出した思想家、柳宗悦の論文に感銘を受け、生涯の師と仰ぐようになりました。その翌年には、柳たちが上野公園の大礼記念国産振興博覧会に建設した「民藝館」で、沖縄の紅型の風呂敷を目にして「こんな美しい楽しい染物以上の染物があるか」と強い感動を覚えます。柳と紅型、この２つの出会いを機に、芹沢は染織家への本格的なスタートを切ったのです。

「鯛泳ぐ文着物」
1964年
紬に型染

「縄のれん文のれん」
1955年　木綿に型染

61歳から華開いた人生

昭和６（1931）年に柳は念願だった民藝運動の機関誌『工藝』を創刊することを決め、型染の装幀を芹沢に依頼します。これがきっかけとなって、ドンキホーテを日本の武士に置き換えた豪華な『絵本どんきほうて』（昭和12〈1937〉年）など、生涯に500冊以上の本の装幀を手がけています。

しかし、昭和20（1945）年の東京空襲により家屋、工房、家財を失い、約６年間、知人宅を転々と寄寓

『絵本どんきほうて』1937年　和紙に合羽刷

『工藝』一号
1931年
木綿に型染

「1952年
カレンダー」
和紙に型染

する生活が続きます。工房がなくなってしまったため、この間の作品はマッチやカードなどの小品が多いのですが、その中で生まれたのが和紙に型染を施した「型染カレンダー」です。戦後の暗い時期に発売された華やかな彩りのカレンダーは人気を博し、その製作は没年まで続き、広く人々に知られることになりました。

昭和31（1956）年、61歳のときに「型絵染」で人間国宝に認定されてから、一気に芹沢の世界は華開きます。フランスの画家、バルテュスが驚嘆して持ち帰った「鯛泳ぐ文着物」など代表的な作品の多くはこの頃のものです。また、漢字を模様化した作品や身の回りの品々をモチーフにした作品も増えていきました。

65歳から75歳にかけては、倉敷にある大原美術館工芸館の設計から内装までをデザイン。79歳のときには生涯最大の型染作品となる、京都・知恩院御影堂荘厳布を完成させます。そして、81歳のときには、パリ国立グラン・パレで「芹沢銈介展」が80日間開催され、大評判となりました。

芹沢銈介のもう一つの顔

画家であり染色家でありデザイナーでもあった芹沢のもう一つの顔が収集家です。

空襲で焼けてしまいましたが、芹沢は若い頃から神社などで奉納される「小絵馬」をコレクションしていました。知り合ったばかりの頃、柳はそのコレクションを見るために芹沢の家を訪れ、その収集を高く評価しています。

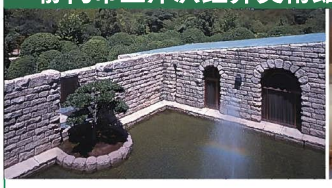
「八十七翁」
1982年　和紙に筆彩

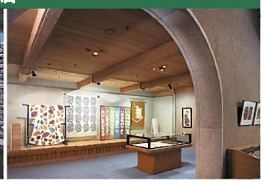
「知恩院御影堂内陣荘厳布・柱巻の下染」
部分　1974年　和紙に筆彩

戦後も収集は続いていましたが、経済的余裕が生まれた70代から、日本をはじめとするアジアやアフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカの家具や染織品、陶器、絵画と収集の幅は一気に世界へと広がりました。その数、なんと6000点。そのうち4500点が静岡市立芹沢銈介美術館に収蔵されています。いずれも芹沢が自分の目を通して良いと感じたものばかりで、これらは作品のモチーフにもなりました。

３度の苦境をくぐり抜け、芹沢が彫った型紙は、戦後だけでも1万枚。柳が染物の世界でただ一人の「模様の生める人、模様にこなせる人、模様を活かしきる人」と評したその作品は、今見ても古びることなく、オリジナリティあふれるものです。

静岡市立芹沢銈介美術館





1981年、芹沢が86歳の時にオープン。作品800点と収集品4500点を所蔵。「民藝風にしたくない」という意向を受け、建築家白井晟一に設計を依頼。静岡県駿河区の登呂公園内に建てられた美術館は、1998年には建設省（現国土交通省）の「公共建築百選」の一つに選ばれています。

住所●〒422-8033　静岡県静岡市駿河区登呂5-10-5
電話●054-282-5522
入館料●一般420円、高・大生250円、小・中生100円
休館日は月曜日、祝日の翌日、年末年始、展示替期間中

芹沢銈介の家

開館日●美術館開館日の日曜と祝日
（８月は土曜日も）
入館料●無料

「ぼくの家は、農夫のように健康で平凡です」

美術館から歩いてすぐの場所に、芹沢銈介の家があります。この家はもともと宮城県にあった板倉で、１階は米や野菜、農具などを収納、２階は雇い人の宿泊所として使われていました。芹沢はこの佇まいに惹かれ、昭和32年に東京・鎌田の自邸内に移築。没後、昭和62年に現在の場所に移されました。主に応接間や構想を練る場として使われていた１階は、彼が収集した世界中の工芸品が置かれていて、愛着ある空間だったことが偲ばれます。

掲載作品はすべて静岡市立芹沢銈介美術館蔵